

水の天使

琵琶湖近江路探訪



文・竹田聖彩



Instagram

2023ミス日本「水の天使」竹田さんのInstagramに、琵琶湖に探訪に行った動画が公開されております。

こちらからご覧ください



第1弾



第2弾



第3弾

(10月下旬撮影)

琵琶湖を歩く

この日最初に向かったのは大同川にある「大同川水門」です。

琵琶湖は、一級河川だけでも一七本の川から水が流れ込みます。その一方で、琵琶湖から下流へ水を流す川は一本、瀬田川だけと聞き、本当に驚愕しました!!

大雨が起これば排水が難しく、湖から川へ逆流した水が、琵琶湖周辺に浸水被害をもたらします。そんな時に活躍する水門、そしてポンプについて紹介したいと思います。

水門は川を堰き止めて逆流を防ぎ、ポンプは川の水を湖に排出します。高速で回転し、稼働しているポンプは当然サビ、すりへりが生じます。

そんな中、機械を稼働させ続けながらも効率的に、全てのポンプを故障なく保てるよう考え抜き、計画する難しさをこの日、痛感しました。

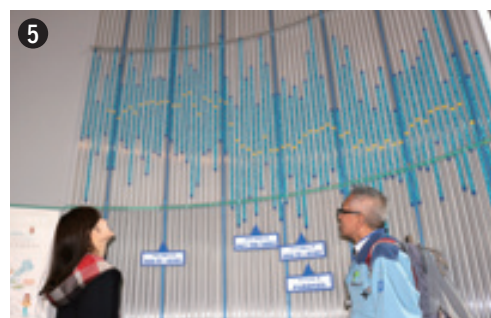
職員一人一人が力を尽くして、考えて、日々をこなさなければ保たれない琵琶湖の安全、その知られざる努力、尽力に感謝の念が募ります。

さらに、琵琶湖の唯一の下流河川、瀬田川と琵琶湖の総合的な水管理を知ることができる「水のめぐみ館アクア琵琶」にも向かいました。琵琶湖からの流量を全て管理する※「瀬田川洗堰」では、琵琶湖の水位を調整して、渇水、洪水が起らないよう日々管理がされています。

琵琶湖の整備がされていない明治時代には周辺地域が238日水に浸かってしまったこともあるそうです。なぜ今は、そんな災害は起きなくなったのでしょうか。それは長い年月をかけた湖岸堤の



①大同川水門
②大同川排水機場内へ出発!
③大同川排水機場のポンプ設備



④テラス席から見た瀬田川洗堰
⑤琵琶湖の過去の水位グラフ
⑥瀬田川の今と昔の洪水の原理模型

※I：国土交通省管轄の施設

今回の近江路探訪MAP

滋賀県



こんにちは。2023ミス日本「水の天使」竹田聖彩です。今回、滋賀県にある琵琶湖開発施設を含む近江路を探訪させていただきました。琵琶湖の水位や歴史には、先人の皆様が立ち向かった様々な困難、琵琶湖とその周辺の街を守る工夫、そして現代に受け継がれる数多くの技術が詰まっていました。琵琶湖開発施設を管理する水資源機構では琵琶湖の水への治水、利水、環境、管理の、大きく四つに分かれた取り組みが行われています。

この探訪は、そのお仕事について詳しく知る、得難い体験となりました。

整備、ポンプ場や瀬田川洗堰の流下能力向上工事や水位の管理の結果なのだとなりました。費やされた年月と下流上流の合意を得るための努力により達成された、各自治体や住民を含めた協力体制という悲願の結実を感じました。



④かつて琵琶湖の周辺にはゾウが生息していたそうです ⑤オオムラサキの実物標本を観察
⑥昔から現在に至るまでの琵琶湖での生活の様子を勉強



知る・学ぶ

最後に訪れた滋賀県立琵琶湖博物館では、何かを触って、見て、考えて、自分で発見する体験ができる、数多くの魅力的な展示がありました。展示や標本の繋がりを考えて、観察し、書き留める行為、これが子供達にとって当然になれば、将来何かを考え、行動することが楽しみとなると思います。幼少期の体験、発見の感覚が記憶されることで、想像力に溢れた人格形成の助けになると思います。

博物館では他に、意識しなければただ普通だった素材に歴史が刻まれていると気づき、意味を持たせる展示や、人間を中心とした歴史にとらわれないう、あくまで登場人物として人を育む自然の展示を引き出しをあげて宝物を見つけ出すような好奇心を掻き立てる展示などたくさんありました。様々な過去の視点を保存し、後世に伝えられる喜びを大切にする、博物館の温かみを、真に感じました。

琵琶湖への想い

今回琵琶湖の歴史を遡ると、琵琶湖では、はるか昔の飛鳥、奈良時代から、洪水に悩まされ、様々な努力が行われていたことが分かります。歴史から思いを受け継ぎ、人の命と暮らしを守る志を受け継いだ、琵琶湖開発の大事業。管理を怠らず、日々立ち止まることなく琵琶湖を守り続けてくださる水資源機構の職員の方々のおかげで、悲願であった「安全な琵琶湖」の姿を見ることができました。

各施設、水門の場所やパンフレットを読まずと



①湖畔をサイクリングしました ②サイクリストの聖地碑でパシャリ！
③守山新川樋門を発見



琵琶湖の生態系

途中訪れた「新浜ビオトープ」では、琵琶湖の生態系を学べます。琵琶湖から水がひかれるビオトープには、もちろん琵琶湖の魚もやってきます。フナ類の産卵育成の場として、このような浅瀬があることで外来種からも卵が守られるそうです。また、一般公募による「お魚里帰り大作戦！」としてビオトープの干し上げを行います。琵琶湖の生物を学びながら、ビオトープが干上がる前にお魚を琵琶湖へ戻すお手伝いができるなんて、楽しそうです。

施設を巡る道中、湖岸に沿った綺麗な道路を通ります。なんとその道路は、それ自体が湖岸堤だそうです。こんなに長く、美しく整えられた湖岸堤が整備されるために、どれだけの苦労があったのか、計り知れませんが、そんな美しい湖岸堤や湖岸周囲はサイクリングの聖地となっているそうです。私も実際にに行ってきました。

サイクリングの聖地とあって、私の他にもたくさんの方々がサイクリングを楽しんでいます。私もいつか、ビワイチの琵琶湖一周200kmのコースを完走したいです。このサイクリングコースはナショナルサイクルルートに制定されたそうで、インフラツーリズムが真に輝く姿を見ました。サイクリングコースの周りには、水資源機構が管理する水門がたくさんあります。なんと全部で158箇所あるそうです。水門を巡ってサイクリングの旅、なんていうのも楽しそうですね。

今年のお魚里帰り大作戦！の様子 11月12日(日)実施



新浜ビオトープを見学

子供達が実際に魚を触って、実際に見て、魚種を知る、こうした生きた体験は自分の育った琵琶湖周辺への愛情や生態系を守りたいという自分ごとの意識につながるとしています。自分で掴んで、考えて、そうした体験を提供してくれる場があるって素敵ですね。

琵琶湖博物館でびわ湖カレー！

びわ湖カレーを一目見て、驚いたのがその見た目です。なんと、カレーの中にご飯で出来た琵琶湖が！。琵琶湖の型はオリジナルで、デザインし制作したものだそうです。カレーは辛さが控えめでどこか懐かしい味。お子さんも美味しく楽しく食べられるびわ湖カレーを、お昼ご飯の後なのに、ぺろっと完食してしまいました！



びわ湖カレー

